

新しくなる典礼⑤「ミサ」が変わってしまうの？

『新しい「ミサの式次第と奉献文」の変更箇所』

～ 2022年11月27日(待降節第I主日)からの実施に向けて～

【感謝の典礼】 その1

「ことばの典礼」が終わると、奉納が始まり、その間祭壇の準備をします。奉納行列では、感謝の典礼のためのパンとぶどう酒、また教会の宣教活動と困っている人を助けるための他の供えものや献金などをささげますね。

イエスさまは、ご自分の一番大切なものをささげてくださったのよね。

司祭が唱える祈りのことばも変わったところがありますよ。

・ぶどう酒を供える祈り…祭壇の準備が整い、パンを供える祈りの後、ぶどう酒を供える祈りをします。

司祭：神よ、あなたは万物の造り主。ここに供えるぶどう酒はあなたからいただいたもの、大地の恵み、労働の実り、わたしたちの救いの杯となるものです。

「パンを供える祈り」は変更ありませんが、「ぶどう酒を供える祈り」は「いのちの糧」が「救いの杯」に変更されました。

司祭：皆さん、ともにささげるこのいけにえを、全能の父である神が受け入れてくださるよう祈りましょう。(現行:全能の神である父)

会衆：(次の祈りを唱えることになりました)

神の栄光と賛美のため、またわたしたちと全教会のために、あなたの手を通しておささげるいけにえを、神が受け入れてくださいますように。(現行:全教会とわたしたち自身のために)

「司祭の手」は「あなたの手」に変更されました。

一同はその後、しばらく沈黙のうちに祈ります(しばらく沈黙のうちに祈ることは、日本のための適応です)。

【奉献文(エウカリスティアの祈り)】

奉献文は神に賛美と感謝をささげる「祭儀全体の中心であり頂点」となる祈りで、ラテン語では“Prex eucharistica”です。“eucharistia”ということばの豊かな内容を表すため、表題に「エウカリスティアの祈り」が加わりました。

◎叙唱前句：奉献文は、叙唱前の司祭と会衆との対話句から始まります。

・現行版は2組の対話句でしたが、改訂版では3組の対話句を用います。

・「また司祭とともに」は「またあなたとともに」に変更されます。

司祭：主は皆さんとともに。 会衆：またあなたとともに。

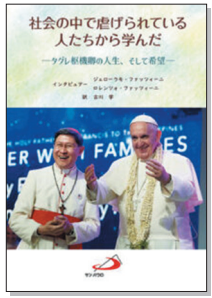
司祭：心をこめて、 会衆：神を仰ぎ、

司祭：賛美と感謝をささげましょう。 会衆：それはとうい大切な務めです。

「奉献文」の変更箇所について、この続きは次の機会に詳しく説明しましょう。

(文・絵 大阪教区典礼委員会)

図書紹介



『社会の中で虐げられている人々から学んだ』として希望— タグレ枢機卿の人生、そして希望—

タグレ著／古川学訳

(サンパウロ刊、2022年、税込1980円)

前田万葉大司教

おすすめ言葉

「あなたがたは日本に宣

教にきた宣教師たちで、わたしは日本人と夜居酒屋でニコニコとお付き合いしていただきました。会うたびに『イザカヤ！ イザカヤ！ (居酒屋)とおっしゃってくださいます。偉大な神学者・枢機卿でありながら非常にフレンドリーで、寄り添いの宣教師者としての人柄が本書に

うためにバスで外出し、華美な服装を求めず、ごく普通の平服を好む。本書は、次期教皇候補ともいわれるタグレ枢機卿へのインタビューである。(表紙の言葉より)

この本が発行され、読者としての人柄が本書にの教会に必要な言葉で溢れていることが分かった。一つ二つ選んでみよう。

Q 「羊のにおいのする牧者」を得るためには？

Q 「あなたの最後に簡単な質問がある。イエスを一言で表せば？」

タグレ枢機卿は来日の折、フィリピン人たちに、なぜ人の心を打つのか。彼は車も持たず、人に会

必要なのは、自分自身に忠実で、真の「人」

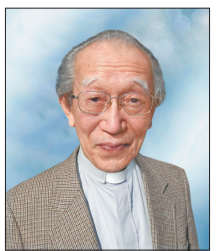
この本の最後に簡単な質問がある。

「カテキズムの学び」は今月号はお休みにします(6月の講座中止のため)

大阪教区司祭

ベネディクトラブレ

生藤達男神父(97歳)帰天



生藤達男神父は7月11日、老衰のため、カトリック仁豊野ヴィラで帰天。長きにわたり小教区で宣教司牧に携わり、体調を崩される

まで司牧者として奉仕された。

【略歴】 1925年4月16日、兵庫県生まれ。64年3月、司祭叙階。3年間、大司教館で秘書代理。67年、85年、尼崎、住之江、宝塚で主任。その後、教区事務局の事務局長として6年務めた。91年から住吉、八尾で主任。99年、02年、かわちブロックでモデラートル。05年まで旧大阪南・南ブロック(現・堺ブロック)協力。2010年までガラシア病院チャプレン。その後、仁豊野ヴィラで静養。

討報



Sr.マリア・ソフィア 米岡敏美(大阪聖ヨゼフ宣教修道女会)は、6月14日、老衰のため介護老人保健施設ドムスガラシアにて帰天。94歳。新潟県出身。奉

看護に対する強い熱情と信念、豊富な知識と経験をもち、長年ガラシア病院にて奉職し、病気で苦しむ弱い人びとに寄り添い、博愛と奉仕の精神で後輩の指導にもあたった。また、野山に生息する植物を大切に、詳細に観察し表現することを楽しんで

生かす「難民救済者」

外務省はアフガニスタン避難民を帰国させた



7月6日深夜、シナピス職員のロキアさんから「外務省がアフガニスタン人を9日に強制的に帰国させる」と電話がありました。タリバンの支配で2400万人が人道危機にあると国連が指摘するアフガニスタンへ日本政府が帰国させるとは。翌朝、私は東京へ向かいました。

去年の夏、タリバンが侵攻し大混乱に陥ったアフガニスタンでは各国が直ちに大使館を閉じて関係者を国外へ避難させました。日本政府も大使館関係者を日本へ退避させました。

増額支給」と迫られ、大使館の中で身分の低いハザラ民族の運転手、コック、庭師たちが先に帰国に同意させられました。

「ここは地獄だ、金品は盗られ、殺され、子どもは誘拐される。戻ると猛反対される」と聞きません。日本の友人たちは「バカだ、狂っている」と怒りました。その時、ロキアさんの夫のナジブラ医師が「悲惨な体験をし抑圧されている人は正常な判断ができない。安心できる環境に移し治療が必要だ」と指摘しました。私たちは精神科を探し、弁護士は外務省に帰国させないよう申し入れましたが、努力の甲斐虚しく、9日、12日、15日とハザラ民族の家族を乗せて飛行機は飛び立ちました。「父の決めたことに絶対従わないといけないです。生きてたらいつか日本へ留学したい」。帰国当日、13歳の娘は私に「そう告げて、シヨールを翻して去ってゆきました。」

(文 シナピス事務局 ビスカルド篤子)